

■令和8年9月定例記者会見

日時：令和8年8月26日(水)午後2時～3時

場所：吹田市役所高層棟4階特別会議室

【9月定例会等に関する質疑応答】

広報課

それでは、記者の皆様からご質問をお受けしたいと存じます。まずは、先ほどご説明いたしました予算案件及びPR案件につきましてのご質問をお願いいたします。

ご発言の際には挙手をいただき、社名をお願いいたします。どうぞよろしくお願いいたします。

記者

市長にお伺いしたいんですけども、ガンバ大阪の中学校区部活動の委託で、一般のスポーツクラブに委託するという点もあったりもすると思うんですけども、ガンバ大阪さんに委託することの意義といいますか、あと期待について教えていただけたらと思います。

市長

J1のチームが全国にあるんですけども、全国の自治体の数、先ほども言いましたけど1741です。市でいうと800近くあるわけですよ。

その中で、ガンバ大阪がこの吹田にあるっていうのは、我々その価値はある程度気づいているんですけど、周りからするとものすごく羨ましがられています。

で、じゃあどうその価値を最大化できるのかというときに、クラブ活動の外部化というのが今全国的に流れとしてあります。

特に団体スポーツって内部でとてもできなくなってきました。

というのは、先ほどありましたように、指導者がはたしているのか。

それと、サッカー11人、プラス部員全部で30人とかになった時に、この少子化がどんどん進

んでいるときに、一つの学校でチームを編成できない。

ラグビーもそうですけど、野球も合同チームの流れになっていっています。

その合同チームの中にも、すごくレベルの高い子、それから楽しみたいだけやねんという子と様々いてる中で、幼少期、子どもの時の感性が豊かな時に、その感性にインパクトを与えるっていうのが文化・スポーツの大きな意義だと思っています。

幼少期が16、17、18(歳)までかって言ったらそうじゃなくて、ワールドカップでも10代の選手が出ていますよね。

ということは中学ぐらいがもう十分大きいんですよ。

小学校、中学校の時にプロのプレーを目の前で見ることによる、その感動、インパクトというのはすごく幸せなことやなと。

確かにコーチも必要なんです。でも、テレビで見ている、Jリーグで活躍しているその選手が目の前に立っているだけでも刺激を受けます。

スポーツをやっている子はだんだん減ってきている中で、このガンバ大阪の力をいただきながら、かえって応援団もサポーターも間違いなく増えますし。

お互いパートナーとしてこのサッカー、それと子ども両方支えていきたいというのが、今これから本格的に取り組もうというところです。

記者

一般のスポーツクラブじゃなしに名門クラブに委託するっていうのは、そういった効果というか？

市長

一般クラブは一般クラブの良さがあるんですよ。コーチングのプロですから、コーチングのプロとプレイヤーのプロと、全く別です。

ただ、プレイヤーのプロに接する機会って子供はほとんどないんで、遠くから見ているだけなんです。

両面です。チームの戦略性を教えたりとか、ドロップアウトしそうな子に「まあまあ、そう言わん

と」って、それはコーチングなんですけれども、両面から子供の部活を支えていきたい。

これは教育委員会の考えでもあります。

記者

大きな刺激になるということですかね？

市長

刺激なんですけど、感受性が豊かな時にそこにインパクトを与えたいんですよ。

私も文化でも音楽でもスポーツでも、小学校の時にインパクトを与えられたという経験、みなさんもあると思うんですけれども、そういう経験っていうのはある意味大きな教育だと思うんですよ。

それを学校の中では限界がある。

外部化はなんかもう支える人が居ていないからやむを得ずじゃなくて、外に出した方が良いものっていうのは必ず教育上ありますから、そういう考えでやっています。やろうとしています。

記者

ちょっと内容の細かいことも伺っていていいですか？具体的にどのような運営を委託するということなんですけど、ちょっと市長のトッププレーヤーを見てもらうという具体例もいただいたと思うんですけど、ちょっと具体的に、今先方と話し合っている中で、こういった指導とかグラウンドをどこでやるとか、多分お考えがあると思うんですけど、ちょっと聞かせてもらえたらと思います。

教育未来創成室

教育未来創成室の方からお答えさせていただければと思います。今回の部活動の外部委託としまして、実際に今、中学校で行なっておりますサッカー部、教員が顧問としておるサッカー部をガンバ大阪様の方に委託して、中学校で行う部活動を外部委託するという形態でございます。

令和 9 年度から平日でいきますと 3 日間、1 日あたり 1.5 時間部活動を行うのですけれども、平日 3 日間と土日どちらか 1 日 3 時間の活動を実際にガンバ大阪様のコーチに指導いただく。

また、平日の指導だけではなくて、大会参加の際にも監督、コーチングをしていただきますし、生徒の引率等も実際に行っていただくというものでございます。

記者

活動場所は学校になるという？

教育未来創生室

中学校のグラウンドを想定しております。

記者

土日も含めてということでございますね。その選定はどのように行っていくのでしょうか。希望が 20 校ぐらいあると思うんですけど、殺到するような気もしますけど。

教育未来創生室

実際に選定はこれからの調整にはなるんですけれども、今後、部活動を外部委託していくにあたりまして、先ほど市長もおっしゃっていただきましたように、合同部活動といったような 2 校で 1 チームを作るですとか、実際中学校に部活動がない子が他校に参加する拠点校といったような形式も考えられますので、市内の地域を見ていきまして、ある程度バランスよく配置をしていきたいというふうに考えております。

記者

そうすると、対象は 3 校ではなくて、少ない生徒さんのところを含めるともっと増えてくるかもしれない。

教育未来創生室

サッカー部が幸い市内 18 校中、17 校にサッカー部がございますので、今、自校でサッカー部に参加できない学校については 1 校だけになりますので、今回、令和 9 年度からの取組で、新たに自校にサッカー部がないけれどもサッカーに入れるという学校につきましては、1 校増える形にはなるんですけれども、その先、児童生徒数のバランスなども見ながら、2 校で一つの部活、クラブを形成するですとか、そういったところも視野に入れて、モデル実施、効果検証を図りたいと考えております。

記者

わかりました。指導されるコーチは、このガンバ大阪アカデミーという、そのトップを目指す子供たちの育成を行っているところかと思うんですけど、その所属の方々で？

教育未来創生室

今のところ、小学生を対象とした教室を指導しておるアカデミーのコーチを中心に指導いただけるというようなことで詰めております。

記者

元選手がいらっちゃっていたりとか、そういった情報とかであったりするんでしょうか。

教育未来創生室

指導者の中には元プロの方もいらっしゃるということで。

記者

その方が必ずしもという感じですかね。

教育未来創生室

まだ決めている最中になりますので、実際お名前を出してどの方がというところまでは確定を
しておりません。

記者

ガンバの件で続きなんですけど、ご存じなければ結構なんですけど、Ｊリーグのクラブで実際に
学校の部活動の指導というかですね、運営の連携をされているクラブとか自治体の実例み
たいなのはあるんでしょうか。

教育未来創生室

教育未来創生室の方が把握している中で、学校の部活動の形で携わっているところは把握は
しておりません。

記者

あるかないかはリサーチをされたんですか。

教育未来創生室

近隣市は確認しておるんですが、近隣市は部活動の形を残さずに、認定地域クラブという形で
部活動の地域展開を行っている自治体がほとんどになりますので、部活動のまま残してとい
うような事例はないのかなと考えております。

記者

認定地域クラブというのは、それはいわゆる学校の部活動を引き継いでいるということでは
なくて？

教育未来創生室

学校の部活動を引き継ぐ形ではなくて、地域で活動していた方が団体を作って教育委員会に

認定の申請をしてきまして、教育委員会の方で認定したら認定地域クラブというものになります。

そこに中学生が自ら参加しにいくというような形になりますので、活動場所が中学校であったり、地域の体育館等のスポーツ施設であったりという様々な活動になるんですが、当市の方ではその方向性ではなく、部活動を維持する方向で外部委託という取組を進めております。

記者

今、学校のクラブ活動の働き方改革とかですね、指導者の問題とかで、外部委託であったり、地域連携というのが進んでいる、検討されていると思うんですけど、その流れの中でJのクラブとの連携という話は承知されていないということなんですか？

教育未来創生室

そうですね。他のチームがどれくらいというところまでは申し訳ございません。リサーチはできておりません。

記者

それと、3校で始めるということなんですけど、18校全体に広げられるお考えなのか、それとも特定校みたいな形で、ある程度今後も絞ってされる予定なのか、その辺のお考えはどうでしょうか。

教育未来創生室

一旦、今回の3校でモデル実施という形で効果検証を行っていきまして、その先、他の部活動の外部委託の状況等と合わせて、その先の検討をしていきたいと考えております。

記者

さっきおっしゃった拠点校にして他の学校も来れるとかそういうイメージではなくて、どちらかといえば、その選んだ3校での指導ということになるんでしょうか。

教育未来創生室

おっしゃる通りで、選定しました 3 校の部活動、自校のクラブの運営が、ガンバ大阪様のコーチになるというイメージになっております。

ただ、1 校だけ自校にサッカー部がない学校がございますので、その生徒を受け入れるために、どこかしら1校は拠点校という形で受け入れたいと考えております。

記者

一方で、どうでしょうか。穿った考え方かもしれないですけど、ガンバのコーチの指導を受けられるってなったらですね、その学校に行きたいというような子供さんもいながら、公立だったら行けなかったりとかですね。

要はその辺の不公平感みたいなものであったりしないのかなと、穿った見方かもしれないですけど、そういう部分もあったりするんでしょうか。そういうような考えはあったりしないでしょうか。

教育未来創生室

部活動本来の目的の部分に立ち返りますと、やはり競技力向上のみを目的としたものではなくて、自主性、自立性ですとか、責任感、協調性、そういったものを育成するのが中学校部活動の活動になりますので、その中で競技力の高い指導力というのは魅力的なものだと思いますけれども、やはり中学校部活動の良さというのは様々ありますので、一旦その部分も 3 校でモデル実施をしまして、どういったニーズが出てくるのかというのは、もちろん検証していきたいと考えております。

市長

中学の部活って何なんやっていう話なんですけど、私立は自由ですよ。

日本一を目指す、それで全国から生徒を集める。それも可能ですよね。

公立の中学校における義務教育の中で、文化もそうですけれども、文化・スポーツで今説明が

あったように、ことさら競技性を高めて、どこどこに勝つ、今年は日本一を目指す、それは教育として果たしてどうなのか。

集団の中で成長するっていうのが部活の基本なので、それに結果として成績がついてくるっていうのはいいんですけど、成績を追い求めてエリートだけ残して、残りはもうクラブ参加できないとか、そういう事例もよく高校なんか特にあるんですけど、そういうことは求めてない。

ですので、トッププロがいつもは来ませんけど、ガンバのプロが来て、何かハッとするみたいな感じですね。

徹底的にそれをしごいてチーム力を上げるとか、そういうことは考えてないです。

目の前でプロを見れる機会っていう。

教育の一環としてのクラブ活動ですので。

別にサッカークラブはあるんですよ、他にも。野球もあります。

そこは民間のチームでより上を目指してもらう。そういう子も居ていていいですし。

記者

おっしゃる意義は重々承知ですけど、一方で中学校というのはですね、住んでいる地域によって学区割があって、選択の自由が基本的にない世界で、いろいろ工夫すればあるかもしれないですけど、原則ルールは学校区で校区の学校に行くっていうので、選択の自由がある世界ではないと思うんですよね。そういう中で3校だけ、非常に魅力的な話だと思うんですけど。

3校だけそういう指導を受けて、他の子どもさんたちは受けることが基本的にできないという、そういう現状についてはどうお考えになのかなと思ったんです。

市長

私からなんですけど、ある意味運命だと思います。

これを言ったらもう一言で終わりなんですけど、これだけ学校があって、全員で300人の学校もあれば、1000人超えている学校もあるわけですよ。

クラスの数もまちまちですし、先生の質も違うし、学校のハード面も違います。場所も違います。

全てが均一な教育をしているかといと、全く違います。その先生によって違いますし、地域によっても違います。

ただ、均一じゃなくても公平な教育っていうのは、それは強く意識をしています。

チャンスの公平性ということになりますので、合同でできるっていうのはそこを意識してます。

どうしてもトップクラスで、さっきも言いましたように、将来プロになりたいんやっていう子にそういうチャンスがあるっていうのは、できる限り備えたり。

それが果たして学校、公立の義務教育の学校が担保すべきことなのか。

民間クラブ、いくらでもありますので、そういうとこ、もっとアメリカへ行きますよね。

日本人でも優秀な選手みんなアメリカへ行っているじゃないですか。

いろんなチャンスがあるわけで、そこに行ける行けないっていうのを、ある意味、運命的なものもあります。

そこを均等につていうのはなかなか。我々もそんな目に遭って来ましたから。

ちょっとそこはご理解いただきたいなと。

副市長

我々の予算でとかそんなことじゃなくて、ガンバの方の受け皿の問題が大きい。

人数的なものもあるので。

記者

18校全部というのはまあ。

副市長

だから、将来的にもし広げられる余地があれば検討していきたいなとは思っていますので、そこは最初の試行実施的にやったら、検証しながら考えたいとは思っています。

記者

ちなみに、このご指導内容で 1,000 万円ってめちゃめちゃ格安だなんて、ガンバさんが連携で協力でというので？

副市長

地域貢献で、おっしゃる通りの金額なので。地域貢献ということでやっていただけるということです。

記者

もう少し補足いただいていいですか。

今この委託するのは平日 3 日、1 日 1.5 時間、土日はどちらか 3 時間ということで、部活を毎日やっているようなイメージもあるんですけど、それ以外のっていうのはどのような運用になるのでしょうか。

教育未来創生室

部活動の設定自体が、今回のガンバ大阪に限らず、一律でバレーボール部もバスケットボール部もソフトテニス部もみな平日 3 日 1.5 時間で、土日どちらか 3 時間というのが本市で定めます中学校部活動の在り方の定義のところになりますので、一律の運用ということです。

市長

毎日やっていたのは昔の時代の話ですね。時代が変わっていますので。

記者

ちょっと質問した、珍しさなんですけど、ガンバ大阪さんとして運営を委託受けているのは他の市からはないですか。

教育未来創生室

今回吹田市で調整をさせていただいたのが、ガンバ大阪様では初めてと聞いております。

記者

トッププロを目の前に見てもらう機会っていうのは、その試合を見に行ってもらうのか、それか選手たちが学校に来てプレーをちょっと見せるみたいな。そこは細かい話かもしれないですけど。

教育未来創生室

確定の話ではないですけども、調整の中でそういった、べったりということはもちろん難しいんですけども、指導の中で一部そういったイベント的に触れる機会なんかが作れたらというようなお話は出ているんですけど、ちょっとまだ中の打ち合わせの範疇です。

市長

女子サッカーチームであつたんですけど、女子こそサッカー人口が少ない。

でもやっぱりなでしこを目指している子らも居ていて。

合同でやらんと女子サッカー部は成立しないんですよ。

それ高野台中学校で集まって指導してというのは結構前から吹田市がやっているんですけど、そこに一回ミズノさんがなでしこの川上直子選手を一回呼んでくれたんですよ。

そしたら女子中学生とあんまり背が変わらないんですよ。日本代表で。

もう目の色が変わりましたね。プロの技を目の前で見て、あ、こういうことできるんやって。

私、目の前に居たんですけど。

プロに来てもらうのはこういう意味なんやなというのは実感しましたね。

そういうのを期待しています。

ただ、試合で勝たないといけないのであんまり迷惑かけられないんですけど。

全部が全部 1 軍ではなくても。

記者

ちょっと今ので確認なんですけど、中学生のサッカー部は吹田市さんの場合は、男女分かれてるっていう？

教育未来創生室

男子サッカー部は 17 校にございまして、女子サッカー部は 1 校、高野台中学校に拠点校という形で設置しております。

記者

今回の対象となるのは全部男子サッカー部ということ？

教育未来創生室

全部男子サッカー部です。

記者

女子の指導は念頭にないということですか？今のところ。

教育未来創生室

女子サッカー部につきましては、今、外部委託をしておるんですけども、その中の 1 クラブで、既に 48 部活まとめてプロポーザルで選定しました事業者の方が運営をしてくださっているという状況になります。

記者

基本的なことなんですけれども、ガンバ大阪アカデミーといたら、小中学生が対象ということですか？

教育未来創生室

小学生が対象のところからジュニアユース、ユースと上がっていくんですけども、今回派遣をいただこうと思っておりますのは、小学生を対象とした教室をコーチしていただいている方というふう聞いています。

記者

教室というのはチームがもっているのではなかったですね。

僕の勘違いでしたかね。

教育未来創生室

万博ですとか、いろんなところに各チームがある中の指導に入っておられる方だというふうに聞いております。

記者

コーチは元リーガーばかりではないってことなんですか。

教育未来創生室

ではないとのことですよ。

記者

なんとかライセンスを持ってとか？

教育未来創生室

そういうのはそこまで細かく確認できておりません。

広報課

お時間が残り少なくなってまいりましたので、もし何かまだ詳細など聞きになりたいことがございましたら、担当の方にご確認をお願いします。

他に案件以外でもご質問ございましたらお受けいたしますので、案件でもそれ以外でも何かありましたらどうぞ。

市長

これも子どもの人口が多いからです。全部人口と相関していますから。あらゆる活動が。

吹田だからできることって多いと思いますよ。

記者

あとこの人口の資料の灰色、何を意味していますか？

市長

説明していませんでしたね。

左が数字の順位のハッチングがこれ関西です。

関西全体でどうやって言うのを 1 目で見ていただこうと。

それからもう一つ、黒丸なんですけれども、普通県庁所在地っていうのはみんなが集まってっというイメージがありますけれども、必ずしもそうではない。

特に 32 位のところで一旦スペースを空けていますけれども、その下の黒丸って全部県庁所在地なんです。人口が激減しているっていう。

イメージとして、県庁所在地とか政令市とか、その辺はもう人口減関係ないやろって思うのは

大間違いやっという、そういう資料です。

特にこの 51 位から 62 位までにランキングされているところというのは、様々に生き残り策を、議会でも必ずこの高齢化、人口減少、少子化というのはもう最初の議題になっていると思うんです。

ちなみに吹田市の議会でその話題が出ることはほとんどないです。

まちづくりの話は出ます。今、教育の話も出ますけど。

それほど自治体によって違うというのは感じています。

広報課

よろしいでしょうか。

それではこれを持ちまして令和 8 年 9 月定例記者会見を終了いたします。

今日はどうもありがとうございました。